

『新新訳源氏物語』 あとがき

与謝野晶子

青空文庫

燦然さんぜんと千古せんこに光る東洋文学の巨篇きよへん源氏物語の価値は今さら
 説く必要もない。

私は今を去る二十八年の昔、金尾文淵堂主の依頼によつて、源氏物語を略述りやくじゆつした。新訳源氏物語がそれである。森林太郎もりりんたろう、上田敏二博士の序文と、中沢弘光なかざわひろみつ画伯の絵が添つていた。

その三先生に対して粗雑な解と訳文をした罪を爾来じらい二十幾年の間私は恥じつづけて来た。いつかは三先輩に対する謝意に代えて完全なものに書き変えたいと願つていたのであるが実現は困難であった。今から七年前の秋、どんなにもして時を作り、源氏を改訳する責めせを果そうと急に思い立つ期ときが来た。そしてすぐに書きは

じめ書きつづけ、少い余命の終らぬ間を急いだ。ところが昭和十年の春に私は良人を失った。一家を負ってなさねばならぬ用のふえたことは申すまでもない。また一方くずおれた心は歌を作る以外に力の出しようもないように思われた。その時までにはできていたのは良人がすでに病床についていた頃にも書いた橋姫はしひめの巻までであった。若菜わかな以後は清書もできていかなかった。私は壁際に山積した新新訳の原稿を眺めるながだけで二年をいたずらに過した。以前に大阪へ店を移された文淵堂主と京都で会したのはその頃であった。氏は初期の私の歌集以来引きつづいて私を庇護ひごしてくれた人である。東京でまた店を開きたいという話を聞いて、私のできている新新訳『源氏物語』の話をし、そんなことが機縁きえんになつて

東京で氏の再起がかなえばよいと相談した。氏は喜んでくれた。そのために氏の信仰の深い観音へ礼参りさえもされた。二十八年の昔に拙つたないものを書いて渡した私の成長を疑わなかったのである。いよいよ本が出るようになって私は滅めつざい罪の方法の許された神仏に合がつしやう掌しょうした。

私は源氏物語を前後二人の作者の手になったものと認めているが、その研究をここでこまかに述べることはできない。古来から宇治十帖うじじゆうじやうは紫式部むらさきしきぶの女むすめの大弐だいにの三位さんみの手になったといわれていた。徳川期の国学者は多くそれを否定した。私も昔はそうかと思わせられた。明治に久米邦武博士が或る謡曲雑誌に、源氏は数人の手になったものらしいと書かれた時に、久米氏は第一流

の史学者であるが文学者ではないからと思ひ、私はそれを信じようとしなかつた。新新訳にかかる数年前から私は源氏の作者が二人であることを知るようになった。前の作者の筆は藤ふじのうら葉はで終り、すべてがめでたくなり、源氏が太上天皇に上のぼつた後のことは金色で塗りつぶしたのであつたが、大胆な後の作者は衰運に向つた源氏を書き出した。最愛の夫人紫むらさきの上うへの死もそれである。女によよさんさん みみやや 三さんの宮みやの物ものの紛まぎれもそれである。後の主人公薫かおる大将たいしょうの出生しゅっしんのために朱雀院すずくえいんの御在院中ございんちゆうの後宮ごうきゆうのことが突然語り出され、帝の女に成なの巧たくまみみさは前者ぜんしやうに越こえている。

よく原文を読めば文章の組立てが若菜から違つているのに心づ

くはずである。必ず「上達部かんだちめ、殿上人てんじょうびと」であつたものが、「諸大夫しよだいふ、殿上人、上達部」になつている。昔の写本、木版本でない現今の活字本で見える人は一いち目瞭然もくりようぜんとわかるはずである。文章も悪い、歌も少くなつた。しかも佳作はきわめて少数である。紫式部の書いた前篇は天才的な佳作に富んでいた。後の作者のにも良い作はないのでもない。

目に近くうつれば変わる世の中を

行末ゆくすゑ遠く頼みけるかな

おぼつかなたれに問はましいかにして

初めもはても知らぬ我身ぞ

これらの佳作は後拾遺集ごしゆいしゆの秋の歌の巻頭の大式おほしきの三位作の

はるかなるもろこしまでも行くものは

秋の寝ざめの心なりけり

この歌の詠みぶりによく似ているではないか。

竹たけかわ河の巻の初めに、この話は亡くなった太政大臣家に仕えた

老女房の語ったことで「紫のゆかりこよなきには似ざめれど」と書いてあるのは、前篇を書いた紫式部の筆には及ばぬがということで、注釈者たちが紫の上のことにしてるのはきよつかい曲解なのである。子孫のない紫の上と別の家のことを比較するのはおかしいではないか。

私はその研究を以前していたとき、前篇の執筆と後篇の書かれた間の差に二十六年という数を得た。王朝はすでに地方官が武力

を用いて威を拡めはじめた時代になっていた。陸奥守から常

陸介のすけになった男の富などがそれである。

後冷泉天皇の御勅筆ごちよくひつの額がくを今も平等院びやうどういんの隣の寺で拝見
 することができ、その頃の男の漢文の日記などに東宮時代の
 同帝がしばしば宇治の頼通よりみちの山荘へ行啓ぎようけいになったことが書
 かれてある。後冷泉帝の御乳母おんめのとが大弐の三位で、お供をして行
 った宇治をよく知るようになったものらしい。

歌は前篇の作者にくらべて劣るが凡手ほんしゅでない、その時代に歌
 人として頭角とうかくを現わしていた人の筆になった傑作小説として、
 私は大弐の三位の家の集をずいぶん捜し求めたが現存していない。
 伊勢の皇学館こうがくかんの図書目録にあった大弐集だいにしゅうをよく調べてみると、

三位の娘で、後冷泉帝の皇后に仕えて大弐と呼ばれた人のもので、祖母にはもとより、母の三位の歌にも数等劣った作ばかりのものであつた。

更科日記さらしなにつきにすでに浮舟うきふねの姫君のことがいわれているが、更

科日記は後年になつて少女時代からのことを書き出したものであるから、多少覚え違いがあるかもしれない。私の二十六年は更科日記の作者が上京した年をも参考として数えたものであるが、あるいはいま少しへだたりが多いかもしれない。

若菜において文章も叙述の方法も拙かつた作者は柏木かしわぎになり、

夕霧ゆうぎりになり、立派なものになつてきた。内容に天才的な豊かな

ものが盛られているからである。東屋あずまや以後は技巧も内容にとも

なつて素晴らしいものになつた。前篇の紫式部は小説作家として歌人としていみじき作者であつて、後篇を書いた大弐の三位は偉大なる文学者だと私は思っている。これをくわしく述べる時間がないのは残念である。

昭和十四年

与謝野晶子

青空文庫情報

底本：「源氏物語下巻 日本文学全集2」河出書房新社

1965（昭和40）年7月3日初版発行

1972（昭和47）年4月15日20版発行

入力：めいこ

校正：もりみつじゅんじ

2005年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

『新新訳源氏物語』あとがき

与謝野晶子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>